



天野 静枝さん(北幾世橋)

取材者：浪江町復興支援員アドバイザー 佐藤
NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：8月4日

5年後また笑顔で会いましょう！

(平成10年度浪江中同窓会幹事 天野静枝・坂本裕美より)

震災後山形県山形市に暮らし、県外の町民の皆さんをサポートする浪江町復興支援員として2年間活動した天野さん。その後、ご家族の都合により山梨県で暮らしましたが、今年3月に山形市に戻られました。そこで今回は、7月25日(土)に郡山市で行われた浪江中学校同窓会のお話もお聞きしました。



▲担任だった山田先生と天野さんご一緒に



▼乾杯は相川さん！



■子育て環境を考え山形へ

今回山形に戻ることを決めた一番の理由は、子育ての環境です。1年半山梨県に住んでいましたが、震災後2年山形に住み、今後の子育てを考えると福島に近い山形のほうが良いと思えました。子どものことが一番です。2人の子どもの小学校1年生、幼稚園になり、やんちゃですが元気に通ってくれています。震災直後から活動している団体のイベントに先日も参加して川遊びしたり流しそめんだり。子どもの「次はどこに引っ越すの？」という何気ない一言で、もう大人の都合で振

■かわらない同級生の皆に会い安心しました

地元には週1で会っていた友だちと会えなくなり、電話で声を聞いて会えない寂しさの気持ちを感じていました。そんな中SNSで「このまま皆と会えないのかな。同窓会って形で皆に声掛けてみよう！」と話が出て、坂本裕美さんと私が幹事で開催することになりました。当日は87名も集まり、先生方も3名参加してくれました。震災でばらばらになったからこそ、皆集まりたかったのかも

▼お話を聞いて

り回すのは...と思いき、夫の両親とも話し合い、山形に戻ってききました。山形ではなまりなど気がつかないで過ごすことができました。

■二次会も60名近く、三次会まで盛り上がり、それくらい「来てよかった！」と言ってくれた人が多く、集まって本当に良かったと思うています。それぞれ状況が変わりましたが、自分たちなりの浪江のつながりの形をこれからもずっと大切にしていきたいです。やっぱり地元の方は最高です！次は10年後の男性の厄流しで集まる予定ですが、それじゃ遅すぎるから5年後にまた集まるとういう話になっていきます。また笑顔で会えるのを楽しみにしています！

れません。ただ浪江町でやるのは違いますが、大変でした。はがきも送ったのですが、住所不明で返送されてきて...。それでも、SNSのおかげでだいぶつながりました。残念ながら子どもが小さく行けなかったり、仕事の都合で遠くにいたりして参加できなかった人もいました。皆が集まるのは成人式以来で、久しぶりすぎて話せるかなという人が多かったみたいです。実際に会ったらそんな事は関係なく先生を囲んで楽しい時間でした。どれくらい皆老けているか楽しみだったのですが意外に誰も老けてなかったです！浪江中の校歌を歌えたこともとても嬉しかったです。この年だから落ち着いていて、でもかわらない皆に安心しました。

浪江のこころ通信



・第52号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信/第52号」への感想をお寄せください。
【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





松本 哲夫さん・トシエさん(大堀)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：8月21日

かなかな蝉の声にふるさと浪江を思う



▲蔵書に囲まれて暮らす松本哲夫さん、トシエさんご夫婦



教員だった哲夫さんの退職を機に、浪江町に居を構え30年。

終戦後の大連（旧関東州）からの引揚げ、東日本大震災による避難という大きな困難を乗り越え、支え合って暮らすお二人です。

■哲夫さん
私は、生まれてすぐに父と死別。母とも生別し、4歳で祖父母に連れられ大連に渡りました。20歳で敗戦動乱の大連より引揚げ、一時期、浪江の大堀小学校で代用教員として働きました。その後、北海道で教職に就き定年まで道内に住み、昭和60年、定年を機に浪江に家を立て、移住しました。すぐ近くには高瀬川、里山の自然に恵まれた暮らしは、充実していました。

震災の日の夜、余震で家の中にはいられず、庭に出て寒さに震える私たち夫婦に、「車で一緒に寒さをしのぎましょう」と隣の高橋さんが声をかけてくれました。私たちが夫婦は車を持っていませんでした。翌早朝、高橋さんの車に同乗し津島に避難しました。津島小学校は、体育館も教室も人であふれていました。体育館のステージ下に1メートル四方のスペースを見つけ座りましたが、早目に着いた人たちには配られたという毛布ももらえず、着の身着のまま避難した私たち夫婦は寒さに震えるばかりでした。津島には三晩いた後、3月15日に「原発事故で危険」と、町役場が用意したバスで二本松に向かいました。

一週間後、息子と電話がつながり、平塚市（神奈川県）に住む次男が、福島空港から伊丹空港までの飛行機チケットを用意してくれました。二本松の駅前から福島空港まではタクシーで、伊丹空港に迎えに来てくれた息子や孫の顔を見た時には、心底ほっとしました。その後、半年間は次男の家で、孫たちと一緒に暮らし、日当たりの良い、居心地の良い部屋を提供してくれました。ありがたかったです。しかしいつまでも、息子たちの世話になるのもどうかと思い、平塚市内で借家をさがし、3年半暮らししました。不便さが募り、今住んでいる戸建ての家に、一年ほど前に引っ越してきました。平塚で、かなかな蝉の

声を聞く、ふるさと浪江の風景が浮かびます。蝉の声は同じなのに、暮らしの変わりようは、筆舌につくせません。浪江に帰ることは叶いませんが、思いは浪江にあります。

■トシエさん
手紙のやり取りを継続していた旧大連の女学校時代の友だちの一人に、浪江の自宅から、着の身着のまま避難し平塚で暮らしていることを知らせたら、同窓生等から次々と生活用品や食品が送られてきました。座布団、食器類、割烹着、食べられないほどの餃子……。一緒に暮らしていた孫からは「おばあちゃんには、お友だちがたくさんいるんだね」と言われました。友からの「贈り物」は大きな励みになりました。

ふるさとよ
避難漂泊四歳半ひぐらし啼いて
流浪望郷の思ひしきり
みちのく遠いふるさとに
かなかな蝉のなくころか
ここ湘南の丘の上
夜明けの森の葉がくれに
いのちのかぎりなきかわす
ひぐらしの なく朝は
あふるさとの里恋し
(哲夫さんの詩)



青田 宗夫さん・イク子さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原
取材日：8月5日

帰れる時が来たら帰りたい

青田さんご夫婦が5か所目の避難先として二本松市の安達仮設住宅で暮らし始めて4年。震災時にクリーニングのため預かっていた品物を、2年かけてお客様それぞれの避難先に送ってきたという職人魂を持ち続けている青田さん。

今できる仕事と趣味を楽しみながら、浪江で青田クリーニング店を再開したいという気持ちを持ち続けています。



▲3年前に金婚式を迎えられた青田さんご夫婦

■宗夫さん
高校卒業後にクリーニング店の見習いを始め、その後店を譲られて自分で始めました。震災の日、請戸地区への配達が午前中で終わり家には一人で行きました。町の放送で津波が来ていると聞き、品物を濡らしてはいけないと思い、車に積んで矢沢町の工場に移動しました。その後、家族とは無事に再会して避難しましたが、その時々で大変な思いもしました。毎日のこと

これからの先のことですが、二本松の復興公営住宅に入って、そのあと浪江に帰れる時が来たら帰りたいと思います。月に一度、浪江の自宅に行つて戸を開けて風を通していきます。家の劣化が進み、全体的には解体も進んでいない印象を受けて、行くたびにがっかりします。80歳も近づいてきて、店ができるかどうか考えてもいます。若い人が帰らないと店が成り立たないから、再開のためにもなるたけ多

く帰ってほしい。便利に暮らすためにも多く帰ってほしいと思います。

